

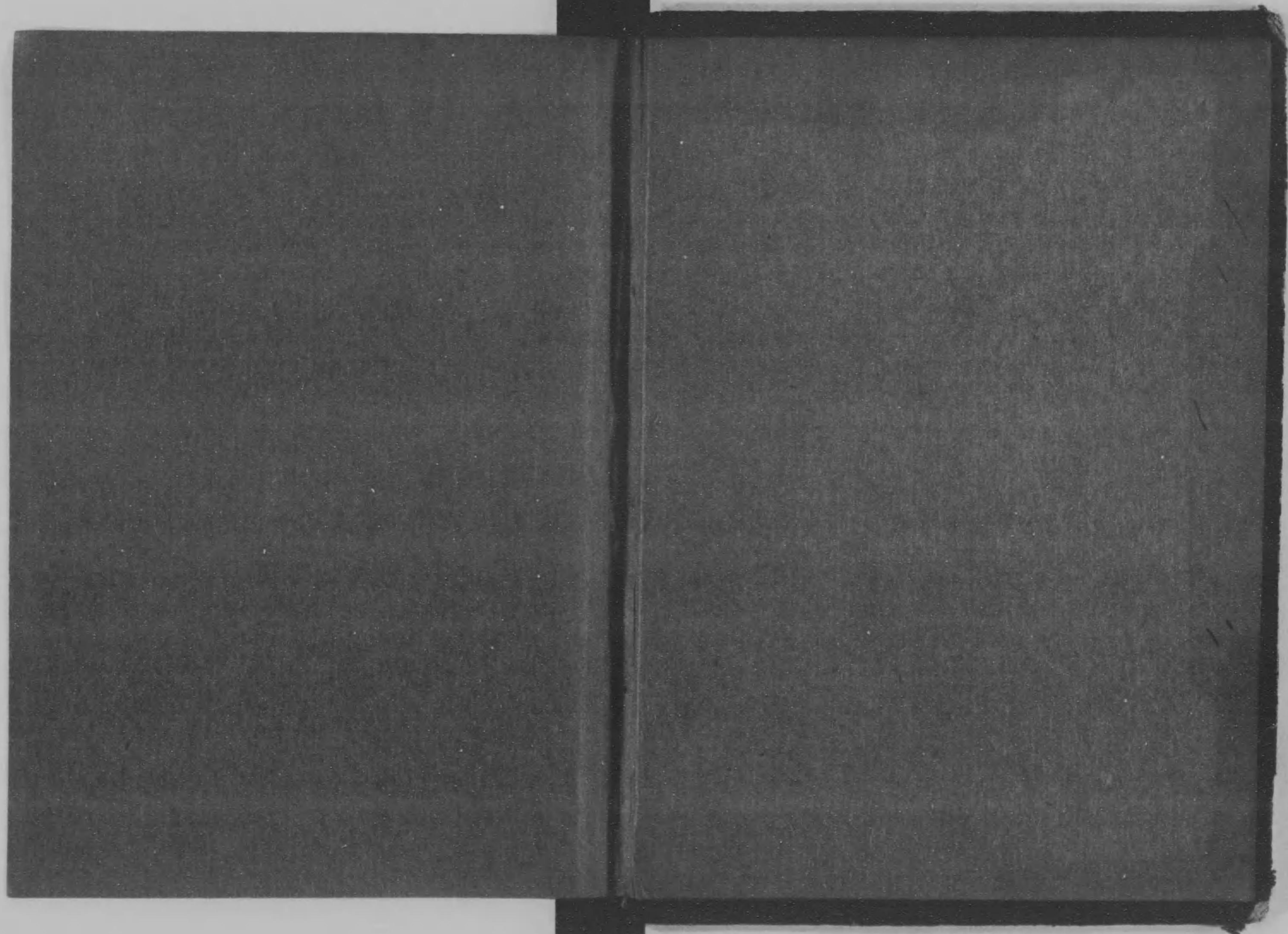
388

106



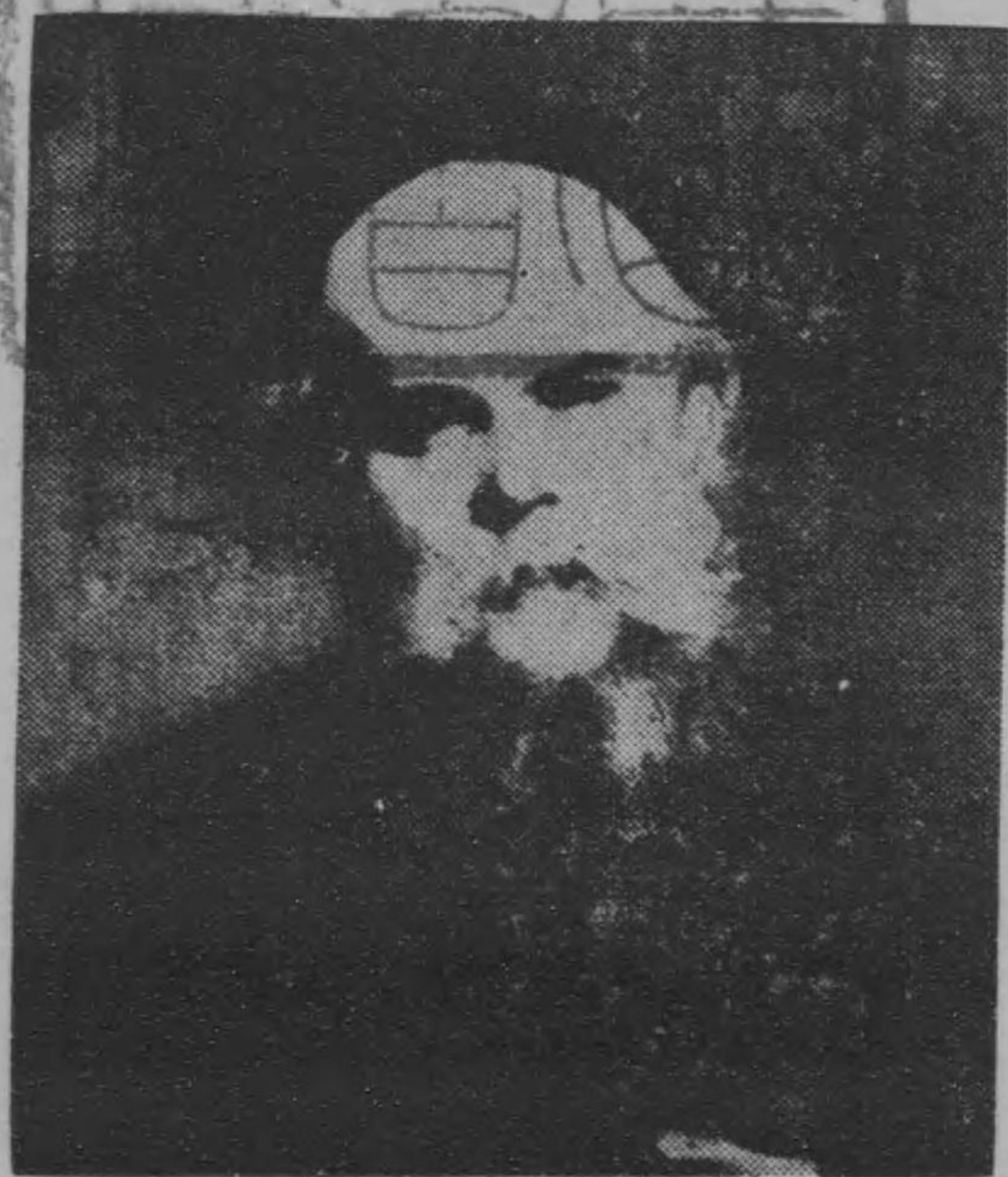
始





388-106

調子本



集詩マール工

大正
譯虹柳橋川

8.9.23

内交

はしがり

詩の味ひは「意味」になく「言葉」にあるのだから詩の翻譯はすべてその効果必然に失ふべきものであらう。ことに言葉それ自身を音樂のごとく匂ひのごとくに取り扱つたエルレーヌの詩に至つてはその感が益々ふかい。その點でこの譯はエルレーヌの臨模ゴッピにさへ達してゐないことを自信する。

けれどもエルレーヌの詩はどこ迄もヒューメンだ。人間的な味ひが沁み渡つてゐる。抒情詩としてこの位信實な詩は古今に尠い。この譯詩集はその人間的な味ひを中心にして譯出した。

エルレーヌに對しては所謂「評價」は無關心だ。どんな絶大な稱賛によつてもその詩がもつ以上の力も加はらなければ、どんな非難をあたへたところでそ

の詩の一句をすら動かすことは出来ない。私は彼の詩をよむ度にその絶大な確かさや大きさがこの人間の深い本然に根ざしてゐることに益々信頼する。繰りかへして云ふやうだが私の譯は拙い。彼の詩をよみかへすごとに消えも入りたけの譯を試してみた。この集のなかで私は誰にもせひ讀むてもらひたいと思ふのは「智慧」だ。あの全篇に漲つてゐる祈禱の聲は人間の恐ろしい本然の聲だ。この章は茲にすべて全譯しておいた。彼の象徴主義はあらゆる彼の詩に行き渡つてゐると思つていゝ。彼は所謂理論のために作詩をしなかつた。たゞ彼の直観が直ちに彼の暗示するすべてであつたと思へばよい。

この原本は彼の詩の選集たる CHOIX DE POESIES である。しかもその全部ではない。自分の譯して効果あると思ふもの、せひ譯しておきたいと思つたものゝみを集めた。

私は嘗て「エルレーヌ詩抄」と題して既にこの書の大半は數年前出版した。しかしその中であとから讀み返すと可成り不滿の箇所が多いまゝその三分の一ばかりは全部今度譯し直した。そして更に新しき詩及詩劇の如きを加へこの一冊をなした。譯し方も色々になつてゐるがなるたけその詩の趣きが出るやうにと工夫しただけだ。言葉や形式の整然としてゐるものは今迄の文語體をとるのが至當に思はれるのでさうした。口語體のもその方が趣がよく出ると思ふものをさうした。中には非常に散文的なものもあるがこれも原詩の形式に拘泥せず、その味ひをはつきり出すやうにしたのである。

一九一九年九月

譯者

原 序

予とボオル・エルレーヌとの相識りしは未だ二十歳を越ゆる幾何もなき時にして、二人は互にその最初の友情を交換し互にその最初の詩を讀みたるなりき。予は今もなほ當時を想見して吾ら二人が額を兄弟のごとくに、その同じ頁の上に聚めたるを思ひ出づるなり。また予が記憶はその最初の熱心と感激と、また當時の吾らが狂奔の感情とを思ひいづるなり。その思ひ出も今は昔の夢なれや。げに吾ら二人は少年にして、互ひにその未來を信じ合ひたるなりき。されどエルレーヌは、吾ら二人が手荒くも手に手を取り、險阻を行くときも守り合はむ、心悲しくもまた確かなる伴侶みちづれとなりぬべき機會には遭遇せざりき。それは常に彼のひとり離れて小兒のごとくありしが故なり。

さはれその事は惜むべきことなりや。人となり智慧を悟る者となるはむしろ痛ましからずや。奔放の情に驅られて走らむことを願ひ乍ら、その身の過つを怖れて走りえざる、歡樂の薔薇を覓むる心切にして荆棘に傷くを徒らに懼るゝ己が指に碎くるを慮りて夢みる願望の胡蝶に觸れもえざる、みなこの類ならずとせむ。痛ましき頽廢に身を任せしこの幸福なる嬰兒は限りなき嗟嘆のなかに身を起しながら、夙くもその事とその悲しみとを忘れつゝなほも涙に濕ほへるその眼をば新しき世界へと打ちひらく。げにその眼は常に燃えたち常に魅はされたるものゝごとくあらゆる自然と人生の上にそゝがるゝなり。かゝる嬰兒の心を保ち感覺の新鮮と愛に對する本能的の欲求とを有し、邪惡の心なくして覺め、信實なる悔悟をなし廉直の心を持って愛し、神を信じて暗きときに眞心こめし祈禱をさゝげ、またあらゆる自己の思想と經驗とを率直にも語り、魅はしき病弱の美と可憐に充ちたる幼稚の語句とを有せしわが憐れなる友の如き詩人

は幸なるかな。

予は敢て復び云ふ、多幸なる詩人よと。予がボオル・エルレーヌが病弱の肉體と悲哀に充されたる胸のなかにいかばかり悩みしかに答ふる唯一の言葉ぞこれなる。げに彼は小兒のごとく何の防衛もなさざりしなり、しかも彼の生涯は屢そを要し彼は痛ましくも傷かれしなり。さはれその悩みは一箇の天才に酬ゆべき賠償のみ。かく云ふはエルレーヌを語るものに於て恐らく當れる處ならむ。何となれば彼の名聲は永遠に新しき詩歌、佛蘭西の文字の中に一新生命を開拓せし詩歌に對する記憶を常に喚起せしむるものなればなり。

然なり矣エルレーヌは、彼自らに信實なる詩歌を創造せしなり。素朴にして微妙なる靈感を有つ詩歌、色も形も朧ろかに神經のこまやかなる震動を喚び起し、胸中の捉へがたき響をも捉ふる詩歌を創造せしなり。その詩は自然の流露を事とし、時に著しく凡庸に見ゆることありともなほ滾々と盡きざる泉の噴出に

似たり。その韻律は自由にして拘束なく優婉なる調和の中にあり。またその章節ストロファは小兒がたす輪舞の曲調に似て廻り且つ歌へるなり。詩句はその止まるところに止る——かくていとめづらかなる美の中に溶け——忽にして一つの音楽を構成す。かくてこれらの模し得べからざる詩の中にありて彼はあらゆる彼の熱情と過失と悔悟と優雅と夢とを語るものなり。またその甚だしく惱まされたと共に甚だしく自由なりし彼の心靈を示すものなり。

かくの如き詩歌は永遠に存在し得べし。予はそれを證明し得るものなり。ポオル・ゼルレーヌの若き朋輩ともからは彼らの藝術と努力との中にすべてを與へられ、歡樂を捨て世上の虚名を捨て、げにわがポオブル・レリアンのごとく麵麩ペンなき日、宿なき夜をも厭はず、その報償として永遠不朽の數頁を得んがために忍び、不死の桂冠の彼らが墓標の上に花咲くを見むことを願ふに至るべし。

ポオル・ゼルレーヌの制作は生きてあらむ。顧みて彼が悲哀と傷痕とを擺脫

すべかりしは死を以てのみ永遠の休息となす基督教會の熱き祈禱に加はるより道なかりしものと予もまた信ずるなり。

貧しくもまた榮譽ありし詩人は風に散る木の葉のごとく歌ふといふよりもむしろ常に嘆きしなり。予の常に愛しました常に予を忘るゝことなかりしわが薄倅の友よ、君は苦痛のなかにありて予の存在に訴ふる處ありしも予の到るはあまりに遅かりしなり。さはれ予も遠からず君が召に應じて行くべき日あるを想ふものなり。然れども君が靈と予が靈とは常に希望に充され、やがては清淨無垢の身となるべき光輝と平和の天國をば常に信じ合ひぬ——さはれ誰か自ら自己の無我と清淨とを聲明しうるの僞瞞をなさむ——かくてそこに心充され、予は君に會合を與へ且つ「予はこゝにあり」と答へむ日は來るべし。

佛蘭西翰林院學士

フランソア・コツベ識

目次

野の調

憂鬱症

返らぬむかし.....	四
三年の後.....	六
祈願.....	七
倦怠.....	九
よくみる夢.....	一一
ある女に.....	一三
悲しき風景	

落日	一五
不思議なる黄昏の薄明り	一七
悲しき逍遙	一八
秋の歌	二〇
牧人の時	二二
夜の鶯	二三
うつり氣	二四
女と猫	二六
ダリア	二八
くちづけ	二九
夜曲	三三
夜曲	三三

華やかなる饗宴

月光	三八
身振狂言	三九
草の上	四二
小 運	四四
散歩にて	四五
あやつり	四七
牧 神	四九
マンドリーヌ	五〇
クリメエヌに	五一
なまけもの	五三

コロンビーヌ……………五
 地上の戀……………六〇
 寂 定……………六三
 悲しい婿曳……………六四

幸ある歌

I 曉のひらけしゆゑに……………六七
 II あさの光りは……………七一
 III 白 い 月……………七三
 IV 馬車の窓から……………七五
 V 煖爐のわき、燈火の狭い灯かげ……………七七
 VI われら二人の喜びを……………七八

四 五

VII これ夏の日の誇りなり……………八〇

無言の歌

忘れたる小唄

I そのもの倦げの夢心地……………八四
 II 吾は知る、その瞬きのうち……………八六
 III 巷に雨のふるとく……………八七
 IV 君よ吾らは……………八九
 V 繊弱き手もて……………九一
 VI つらやかなしやわが心……………九二
 VII かぎりなき倦怠の……………九四
 VIII 霧立ちこむる……………九八

水彩畫

みどり……………100
戀わづらひ……………101
巷の唄……………103
I ジツグをひとつ踊りましよ……………104
II 街のなかなる小川こそ……………106
あはれなる若き牧人の歌へる……………108
ひかり……………110

智慧

I の 卷

I 女の美しき繊弱さ……………114
II 日もすがら照り輝きし……………116
III ルイ・ラシーヌの如き……………117
IV 否とよ、そは……………119
V きけよ、かの優しき歌を……………121
VI かつては吾のものなりし……………124
VII 吾は夢みぬ……………126
VIII 聲……………127
IX 古き代の人の精神は……………131
II の 卷
I あゝ神よ……………137
II わが聖母マリアのほか……………141

III
の 卷

- II その一、神吾に宣へり……………一四五
- その二、吾は答へまつりぬ……………一四七
- その三、吾を愛せよ……………一四八
- IV 主よ、御言葉ぞ吾には過ぐ……………一五〇
- V 汝吾を愛せよ……………一五三
- VI 主よ、吾は戦けり……………一五三
- VII わが兒よ、汝寔に努め覚むるとき……………一五五
- 「おなじく」かくてまた……………一五七
- 「おなじく」えも云へぬ……………一五八
- VIII あゝ主よ、吾何とせし……………一六〇
- IX あはれなる靈……………一六一

- I 希望は麻の中なる藁の芽の如く……………一六三
- II 吾はきたりぬ……………一六四
- III 暗く果しなき睡は……………一六六
- IV 空は屋根の上において……………一六七
- V そもそも何ゆゑぞ……………一六九
- VI 悩ましき角の音林にひゞく……………一七二
- VII あはれ汝幸薄き良きおもひよ……………一七三
- VIII はてしなき小羊の列……………一七六
- IX 海は美し……………一七八
- X 麥の祭よ……………一八〇

昔と今

序	曲(昔)	一八三
詩	論	一八四
衰	類	一八六
序	曲(今)	一九三

愛

朝の祈禱	一九六
わが尋ねしは	二〇六
ヴキクトル・ユーゴーにおくる	二〇八
風 景	二一〇
*あゝわたしはよくも悩んだ	二一五
*おゝ、つゝましく惻巧な愛人	二二七

*わたしは愛に熱狂したのだ	二二九
*森の精は眠つてゐた	二三三
薄暮のおもひ	二三六
ひとりものゝ言葉	二三九
むかし語り	三三一
ブルヌムウト	三四一
*靈の空虚のなかにある	三四五
*夜はまるで天鷲絨のやうだ	三四七
かしこ	三四八
又夫人におくる	三五二

白耳義風物詩

ワルクール……………二五八
 シヤルルロク……………二六〇
 プルユツセル……………二六三
 マリーヌ……………二七〇

並 行

ふざけものムビエロ……………二七四

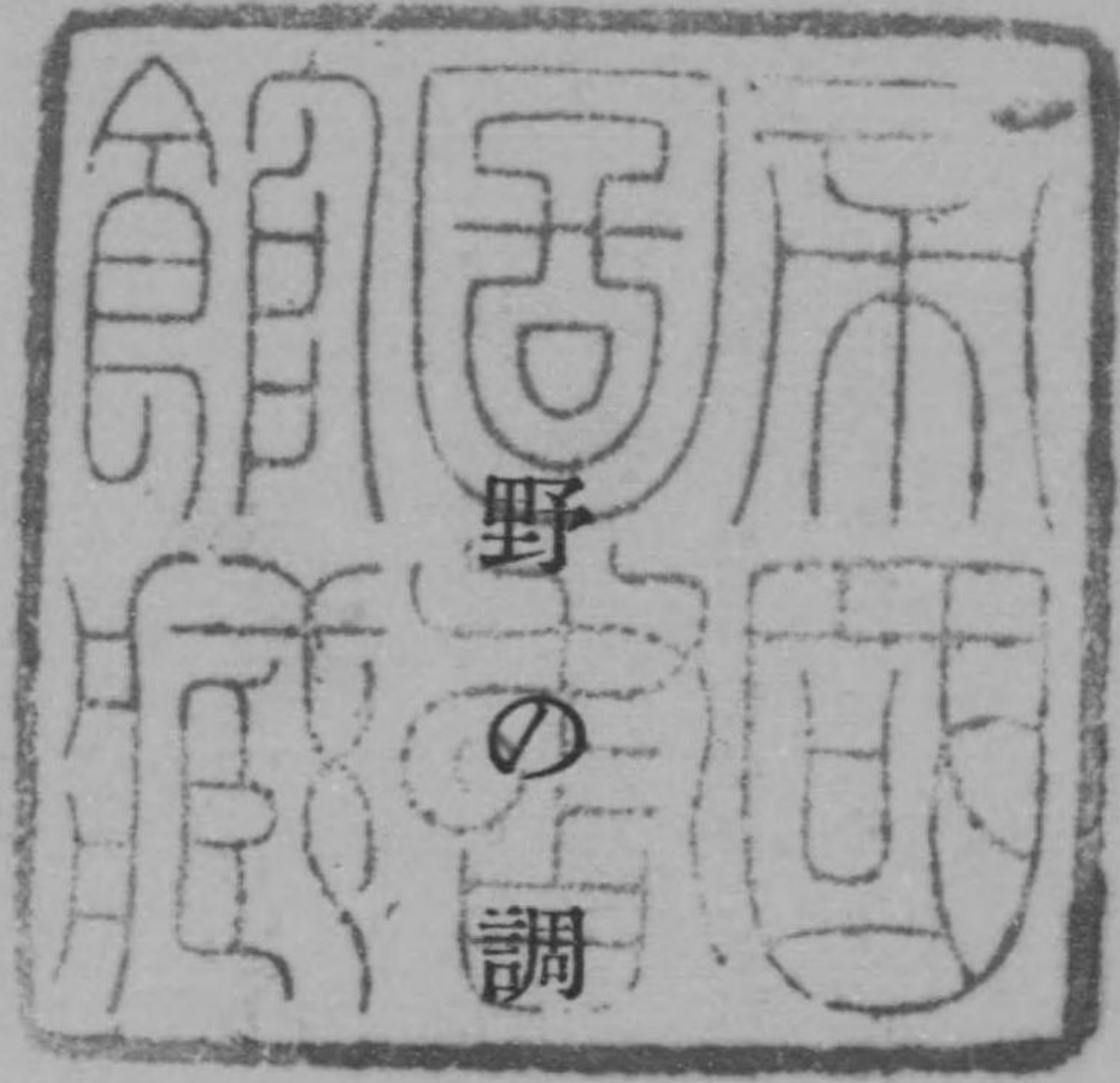
詩劇 お互ひ同士

第一場……………二八〇
 第二場……………二八二
 第三場……………二八三

第四場……………二九三
 第五場……………三〇一
 第六場……………三〇四
 第七場……………三一一
 第八場……………三一九
 第九場……………三三一
 第十場……………三三一

エ
ル
レ
ー
ヌ
詩
集

川
路
柳
虹
譯



憂、鬱症

かへらぬむかし

追憶よ、思ひ出よ、いまにして何をか冀ふ、
衰へし蒼空に鶴の飛ぶ秋、

北風はそよぎて黄ばみたる林には
日の光もの倦げにふりそよぐ時なりし。

われら、髪の毛と思ひとを吹く風に翻らせて
かたみに夢み夢みつゝ歩みゆけり。

ふともものに感ぜし彼の女の眼眸は願きて

『君が世のいと美しき日のいつなりし』とぞ、
冴えわたる黄金の聲。

爽やかなる祈りの鐘か、朗らかにかくも優しきその聲に
つゝましき微笑こそ答へをなせり。
われは敬虔にその白き手に接吻けつ。

あゝ何にたとへん、はつ花の香はしき、
なつかしき瞬きもて戀人の唇をば滴れし
最初の『諾』と語りし言の葉の、あゝそればかりいつも匂はし。

三年とせの後

よるめきかゝる狭とらき扉を押し開き、
吾は小き庭園の中をば歩みゐたりき、
朝の光りやはらかに射さしそへば
花ことごとく露に濡れ、箔を押ししたる耀かじやかさ。

何ごととも變らじ、吾は夢みしなり。
籐椅子といすもてしつらへしさゝやかなる棚には
葡萄ぶさの房火と燃え、噴上ふまの水は今日けふもまた
白銀しろがねの瞬きらめきに昔ながらの慄おそきと、變りなき嘆きをば歌ふなり。

悸ぞく胸の花薔薇はなざうび、昔ながらの花薔薇、
驕りに充てる大輪の百合は微風にうち揺れて、
吾を知ること飛び來り、また飛び去りてゆく草雲雀。

かくてふたたび吾見舞われひしはかのヴェレダ、
並木のはしに色落ちて聳そり立ちたる石の像
——か細くも、木犀草もくせいそうの衰へし匂ひのなかに。

祈願

ああ山オアリスチスの精、むかしの情婦せんならよ、

髪は黄金こがねに、眼は空色、花とにほひしその肌はだ、
若く輝く肉體の香りのなかに
愛の思も恥かしき自然の儘の其の姿。

かゝる歡喜よろこび、かゝるなべての眞まことより女をんならは
いつか離さかりし、あはれすべては心病む
春のかたへと失せ行きぬ、無慘や今は
わが疲れ、悲しみ、さては懊惱なやみの暗き冬ばかり。

今われは彼處かしこにひとり、惱みと孤獨と、
惱みと絶望と、祖父おじいよりもなほも冷く、
また姉もなき憐あはれなる孤兒ひなごの身なれば

願ふは戀の女、軟らかく温き戀の女、
優しげに、もの思はしく、髪は栗毛に、また世馴れたる氣立きだてもて、
ある時は嬰兒おつかごのごとく、接吻くちづけを額ひたいにすなる女こそ。

倦 怠

たゞ優しさ、たゞ優しさ、優しさをこそ戀人よ、
この熱き狂亂の心をしばし和やはらげよ、
逸樂の心高まるをりとても
姉らしき穩かの強しひぬ心を持ちてあれ。

衰へてあれ、眠るがごとき愛の心に、
なが嘆息と空しき瞳のまゝにあれ、
去れよ、執ねき嫉妬と、いつもする奮激と、偽ることをも、
それらみなたゞ一つの長き接吻に價せじ。

さはれ、汝が親しき黄金の胸の中、汝は吾に云ふ、
『わが兒よ、愚かしき慾情は軍笛を吹かんとす
思ふまゝその喇叭をば吹き鳴らせ、痴人よ！』と。

汝が額をわが額におき、なが手をばわが手の中にあらしめよ、
明日知らぬ誓言を吾になしたまへ、
かくて夜の明くるまで泣かむ、おゝ熱に病む少き兒よ。

よく見る夢

怪しくも身に沁む夢をよくも見る、
見も知らぬひとりの女、夢のうち
吾も戀しく彼女も吾を思へど見るたびに
姿定かに分ちえぬ、吾をおもひて吾を知る、見知らぬ女の懐し
さ。

なつかしきかのひとゆゑに、わが胸の
おもひのほどを知るゆゑにへだてもあらぬわがこゝろ
かつは涙に泣きぬれて、わが蒼ざめし額の汗

おし拭ふがに爽やかにわが心をばとり直す。

紅毛あかげのひとか金髪か、はた栗色くりいろか、知らねども、
またその名さへよく聞かね、今は世になき戀びとの
優しよき名とわれは知る。

その眼眸まなざしは彫像のくしき瞳にたとふべし

遠くよりきく穩かの、ものしとやかその聲は
語らはぬいとなつかしき聲のごとくも鳴りひびく。

ある女に

この詩は君に獻まげむ、優しき夢に泣き笑ふ

君が圓つぶらの眼まなこもてわれを慰む優しさに、

君が心の清きゆゑ良きゆゑ吾はかく獻ぐ、

痛ましきわが鬱憂うつろの深みの詩を。

そも何といふ淺ましき、休みなく身を襲ひくる

悪夢は狂ひ荒れまはり、嫉みがましく

狼むねの群のごとくも群れ集ひ、血みどろに

わが運命うしろを後より縊くむり挽くなり。

ああ吾は悩む、醜みにくきばかりうち悩む、

エデンの園を追はれたる劫初むかしの人の悲嘆かなしみも

わが身のそれに較ぶれば牧場の歌に過ぎざらむ。

たゞ君のわが身を思ふころのみ

爽やかに晴れし九月の午後ごの空、

かけりゆく燕のごとくなつかしき。——おゝわがひとよ。

悲しき風景

——カチニールマンデスにおくる——

落日

曉は衰へて

落日の

鬱憂を

野にそよぐ。

鬱憂は

落日に

さるや

忘れたるわが胸へ

優しげの歌を揺る。

不思議の夢

磯に落つる

日の如く、

朱あざに染む幻影まぼろし

とどめなくうち續き、

磯に落つる

大きな日とよもに

とどめなくうち續く。

不思議なる黄昏たそがれの薄明うすあかり

薄明おもしろにうちつれて記憶おもひぞ來りたる、

焔ほと熾さかる希望のぞみこそ衰へて

燃ゆる地平もとのに紅く染みうち慄おそげる黄昏は

かずかぎりなき花と咲くいと不思議の帷帳かまくらのごとくひろこりぬ。

——ダリア、百合、また鬱金香チュリツブと金鳳花キンポーゲ——

環わに角かどにかくも亂れてうちひらく、

氣も重く身からだも温あたたかき薫香かかろと毒素どくすうの

病める息吹いぶきのそのなかに

——ダリア、百合、また鬱金香と金鳳花——
わが感覺を溺らしめ、魂と理智の心を溺らしめ、
かぎりなき眩暈のうちに溶けもゆく
記憶ぞ薄明にうちつれてこそ來りつれ。

悲しき逍遙

落日は臨終の光りをふりそよぎ、
風は蒼ざめし睡蓮の花をば搖る。
蘆間にひらく大輪のその花は
静かなる水のうへ悲しげに閃めけり。
吾は孤り、池の水ぎはにうち沿ひて

傷む心に逍遙ひぬ、柳の繁る庭のなか、
朧ろの霧は乳いろの望み絶えたる姿せる
いと大きなる幻影をこそ呼びよせぬ。
柳の繁る庭のなかひとり傷みて逍遙へば
鳴は聲立て、翼羽打ちて嘆き合ふ、
日の終り、その最終の色ふかき喪の衣は
鬱憂の暗き風にもはためきぬ。
蒼ざめし波に臨終の落日は
残る光りを漂よはせ、蘆のなかにけ睡蓮、
その静かなる水の上に大きなる花をば開く。

秋の歌

秋の日の

半オロンの

聲ながきすいりなき歎なげ

もの倦ちき

疲れ心地に

わが胸を痛ましむ。

たぬのきの

身はーナ

わたふるは

うらむし

胸もふたぎ

おもわ蒼ざめ、

鐘の音は

物ふるま

鐘の音きけば今さら、

過ぎにたる昔さへ

おもはれて

われは泣くなり。

色(て

涙ぐみ

思ひしもの

思ふは

ああ吾は

心なき風に追はれて

こゝにかしこに

さだめなく

飛びも散りかふ

落葉かな。

さだめなく

と散らるる

落葉かな

牧人の時

月は霞んだ地平に赤く
踊る霧のなかに牧場は煙りながら夢み
そよぎ渡る緑の蔭のうへに
蛙の聲がきこえる。

水草の花がその花瓣を開ち、
白楊はずつと遠くまで姿を描き、
眞直に立ち並んで、ぼつと霞む、
叢のほとりに螢がさまよふ。

鼻は眼をさまし、音もなく
重たい翼で暗い空気の中を飛んでゆく、
天一體に仄暗い微光が蓋ふと
白い太白星が輝き、夜となる。

夜の鶯

ものに憎えて立ち騒ぐ鳥の群とも
わが追憶ぞ胸の上に羽搏けり。
わが心は黄ばみたる枯葉のなかに
惱ましげにも流れ過ぎゆく『悲愁』の

黝くろみし葦あしと光る水のうへ、
曲まがりたる枝葉影えだはさす榛はんの樹まを見つめつゝ
かくも騒さわぞく。かくてまた悪あしき戦まぎは
濕りたるそよ風にいづ方かたとなく消えゆけば
森もりかげは仄ほかに薄うすれ、一切いっしょくり物音ものね絶えぬ。
たゞ聞くは『空ひやう』をねがふ聲こゑのみ
かつては花はなも香かばしき初戀はつこいを歌うたひあかしゝ
小鳥こどりの聲こゑ——ああ吾われにはたゞ徒たらに空そらしきのみ。
げに衰しへし身のさまよ——その日の如ごとく鳥とりは歌うたへど、
限りなき悲かなしみのなかに月つきさし
ほの暗くらいと蕭しほやかにかゞよひぬ。
惱なやましく息いきも苦くるしき夏なつの夜よは

沈黙しんもくと暗くらみに充みてり。
優やさしき風空かぜの青吹あおき樹立こゝろを揺ゆれば
樹きはをのきゝぬ、小鳥こどりは泣なきぬ。

うつり氣

——ヘンリーウィンターにおくる——

女と猫

女は猫と悪戯^{ふざ}けてゐる、
白い女の手と白い前足が
薄明^{かたれ}の部屋の中で戯れる、
不思議な眺め。

猫は隠れた——この悪魔女^{あまつちま}め！——

黒い毛絲^{てぶくろ}の手套の下に

瑪瑙色の殘虐な爪を

剃刀^{かみそり}のやうに鋭く光らす。

するとまたやがて甘たるい風^{ふう}をして

その鋭い爪を収めて見たが

どうしてその悪相が消えるものか……

女の閨房^{ねや}のなかでは

かすかな笑ひ聲がきこえ

隣の色した四つの眼玉^{めたま}が煌く。

ダリア

固き胸もつ遊女、暗く褐色の瞳もて
牡牛のごとくゆるやかにうち開く、

いと大きなる汝が莖は新しき大理石のごとく耀けり。

太りたる花、裕かなる花、されど君が傍に

漂ひきたる匂ひなし、君が姿は晴れやかに美しけれど、
えも云へぬよく調ひし風はあれども。

きみのからだに匂ひなし、もし敢てそを求むれば

秣草乾すそのにほひにも譬ふべき
きみが幹こそ香氣感ぜぬ偶像なれ。

——かくの如くダリアは衣燦爛と耀きわたる王なれど
香なきその頸をばいとつゝましくもたげつつ
蓮葉なる素馨の花さくなかに苛立つごとく見えにけり。

くちつけ

接吻は戀の園生にある蜀葵！

鍵盤のうへ燃えるこゝろに

優しい戀の歌を唱ふ生きた伴奏者、

艶めいた疲れ心地にはちやうど天人の歌ともきこえる。

音のする優しい接吻聖いくちつけ、

あゝたとへやうもない快感語りえられぬ酔ひごゝち

人々よ、尊め、汝の歡ばしい盃を傾けて

汲めども盡きないその幸福に酔ふがよい。

リン酒のやうに音楽のやうに

くちつけはおまへを慰めまた安める、おまへの悲みはそのとき
さつと紅を流す唇尖に消え失せやう………

接吻のつくる詩は實に沙翁よりゲエテよりなほ優れてゐる。

わたしは莫迦だ、憐れな巴里の詩人だ、

小兒らしい詩の花束をおまへに献げる、

御機嫌よう。怒らうとする唇のうへに、わたしはたつた一つ知つ
てゐる。

その賜をその接吻をしづかに笑ひながら待ちませう。

夜 曲

夜 曲

墓のふかみに歌をばうたふ

『死』のさゝやきのごとくにも

わたしの女よ、きゝたまへ、低き調へに

漂へるわが鬱憂と偽瞞の聲を。

きみが心ときみが耳を

わが奏けるマンドリーヌにきゝ給へ

きみがためにぞかくは奏づる
痛ましき媚ぶる歌をば。

わたしは歌ふ金と瑪瑙のきみが瞳を、

あらゆる影に光り澄む

また歌ふきみが乳房のレテの泉を、

蔭ふかき黒髪のスチスの川を

墓のふかみに歌をばうたふ

死のさゝやきのごとくにも

わたしの女よ、きゝたまへ、低き調へに

漂へるわが鬱憂と偽瞞の聲を。

かくて賞へむかぎりなき
幸多き肉體を——

不眠の夜に吾をかへらす
豊かなる沈香にも似たる肉體を。

かくて終りに吾は賞へむ紅の
きみが唇への接吻を

吾をむごくも殺したまふその優しさを
——おゝわが天使よ、わが少女よ、

きみが心ときみが耳を

わが奏けるマンドリーヌにきゝたまへ
きみがためにぞかくは奏づる
痛ましき媚ぶる歌をば。

華やかなる饗宴

—フェリシアン・シヤムソオルにおくる—

月光

きみが心は妙なる繪すがた、
古き代の踊り姿と假面とに優しく見ゆる。
琵琶弾きあそび、踊りつれ、そのおもしろき
假装の下にどこか悲しきその姿。

そのさゝやかな姿のうへに聲そるへ
勝ち誇る愛と充ちたる命とを歌ふなり、
さはれ彼ら自らの幸福を思ひみる風もなく
その歌は月の光りに溶けてゆくなり。

悲しくもまた美しき月の光の静けさに
木立のなかに小鳥は夢み
美しき水の流のすゝり泣き
細き噴水の瀧なす水は大理石像の間に飛べり。

身振狂言

タリタンドルには適はしからぬ道化役者
待つ間遅しと口開けた徳利を空虚にし
それから構はずパイを切り出します。

カサンドルは並木路の奥で

勘當された彼の甥のうへに

ひと知れぬ涙をちよつと滴します。

そこでコロンビーヌを擔いで行かうと

さては企んだふざけものゝアル、カン、

これ妙案と四たびばかり身をひねる。

コロンビーヌは夢のうちで

微風そよぐそのなかに何か心がさしぐみます。

そしてその胸にとある聲をばきよしました。

譯者自註

Pantomime

はその濫觴を遠く羅馬に發すれど一種の默劇として完成せられしは伊太利亞中世に於てなり。佛蘭西に入りしは十八世紀の中葉にして初めは悲劇、喜劇共に行はれたれども後生喜劇にその痕を留む。日本の狂言、殊に巧妙なる身振りによつてのみ所作を現はす單純なる演技なるを以て假りに身振狂言の名を以てしたり。默劇と云ふ語生硬に過ぎて内容を傳ふるに難き恨あればなり。登場人物また能の「ワキ」「シテ」の如く常に一定の動作を現はすものなり。伊太利亞に於けるその最初の主要人物は常に三つの性格あり即ち Pantaleone, Arelecchino, Columbina, これなり。いづれも滑稽諧謔を事とす、道化役 Pierrot は宛然わが狂言の太郎冠者に似たり。第一の性格なり。Arlequin は機敏なるふざけものなり。常に假面をかぶる第二の性格なり。また Colombine は女性にして美貌性甚慧しく群りきたる男を戯弄する役なり。この外種々な登場人物あり。Cassandre は Colombine の父と稱せらる、娘を許嫁の Leandre にやらんとして果さ

ず Arlequin の計る所となる。又 Oltandre は色役にして田舎の若者なり。
この外 チルシス Tircis, アメント Aminte スカラムウシユ Scaramouche 等の諸役ありいづれも滑稽を事とす。こゝに收めしパントミームに關する詩「身振狂言」「コロンビーヌ」「あやつり」等皆この默劇の狀景を歌ひしものなり。

草の上

うろつき廻る坊さんが『あや侯爵

貴殿の鬘かづらはちよつと歪よこんでをりますぞ』

『カマルゴオ、この結構なシブルの古い葡萄酒も

そなたの頭くびにはかなひませぬ』

『わしが——おもひは……ド、ミ、ソ、ラ、シ、……か』

『おい坊さま、悪い事が露見しますぞ』

『いや奥さん、この胸の思ひをあなたに打ちあける事が出来な
い位なら

わたしやいつそ死にますぞ』

『あゝわしも狗兒こいぬのやうであつたなら喃なげ！』

『さあわし等牧師同士でキツスしようぞ』

『順々に『いゝか諸君』ド、ミ、ソ、……か』

『やあ今晚はお月様……』』

小 逕

昔の牧者時代の人のやうな厚化粧
大きな房のリボンの結び目に細りと頸を出し
婦人は通りすぎる晝なほ暗い木下蔭
昔ながらの堤の苔むした縁の小逕を。
ちつと馴れた鸚鵡のさまに見入るよな
さまざまな嬌姿をつくつて身振りする。
青く染まつた長い裳裾に大きな指環をはめた
優しいしなやかな指で扇をおもちやにし
粹な話に身を入れる、なにか些細な緒に

ほへと笑へは紅がさし夢みるやうに惚となる
——房々とした金の髪、可愛ゆい鼻、薄紅の花の唇
油ぎつた皮膚、無意識的な氣高い傲慢——加之
面被のなかにちらと輝く眼の光り。

散歩にて

蒼ざめた空と細長い樹立は
わたしたちの晴やかな衣裳に微笑むやう、
羽搏く翼のやうに何氣なく
軽やかに風に翻ります。

優しい風はさゝやかな落窪おちくぼに水を波立て
太陽の光りは力なく輝きます。

低い菩提樹の並木の影がしづれてきて
二人を眞青まうさぎにつゝみそれからすつと消えて行きます。

美しい欺瞞の心と魅まどはしい媚と

誓言ちかひなんかは棄てゝ顧みぬ軟かな心で

私たちはたゞ優しく喃語ささやいてゐます

からするとき戀人は戀人に忍び惱むのです。

眼には見えない手があつて、時をり

骨細い可愛らしい指の上に取り交はす、

接吻のときの吐息を與へるのがわかりませう。
いゝえ、もつと熾んな残酷な吐息ですよ。

その接吻の吐息とそれから

實に冷い眼とまたそのうへに

それと釣り合つたや、寛大な冷笑とて

罰せられるものと、御用心なさいませ。

あやつり

スカラムウシユとブツチネラ

悪いたくみを凝らす所作事しよさごと

月の光りにあざやかなその影法師。

そこへポロネエの名醫どの

枯れ野のなかにしづくくと

薬草摘りに参つてござる。

狭な淫奔女のその娘御

これもおづく樹蔭のしたに

肌も少しくとり亂し、さて偷み寄る。

情夫の美男子スバニアの船のりの

つれなさ、遺瀨なさ、夜の鶯の啼くごとく

胸のくるしさをさてなんとしやうぞ。

牧神

素焼の像の老いたる牧神

緑の芝生のまなかに笑へり

凶日のつゞきしあとに事もなき

泰平の日のきたりし豫象。

きみも、われも

げに惱ましき巡禮なりき、

うち鳴らす太鼓の音に

今日の日の廻りくるまで。

マンドリーヌ

夜の調べのうたひて

着飾つた聴衆、

弾くひとの爪音に

さわやかな舞臺はひらかれる。

チルジスもゐる、アマントもゐる、

さては相變らずのクリタンドルも、

情ないひとに優しい歌をつたへるダミイも出てゐる。

絹の短い胴衣をきて

長い裳裾は後に曳く、

その優しさ、その楽しさうな様子、

そのしとやかな青い衣の影。

うす薔薇色の月の光りに

恍惚と取り巻かれ、

そよ吹く軟らかな風につれて

囀づりしきるマンドリーヌ。

クリメエヌにおくる

不思議なる歎乃ふせぎなる

言葉なき歌のしらべ

戀人よ、きみが瞳はひとみ

空の色なしかゞやけば。

きみが聲音はこゑ

をかき夢を織りなせば

わがもの思ふこゝろを

かくも惱ませば。

白鴿の羽より蒼きしらとり

うつらの匂ひ、

きみが移り香の

清らにゆれば。

きみがこゝろのすべてなれば

胸にしみ入るしらべなれば

世を去りし天使の奇しき光り

音と匂ひなれば。

底知れぬ響のなかに

微妙なるわが心は導かれたへ

音と心は一つにならむ。

われねがふかゝるときこそ。

なまけもの

妬ねたまれたほどの二人ふたりの身とはいふものゝ
どうぢや、ひとつ情死しんじつと出かけては

—それはまた不思議な御言葉。

—不思議でもよい、そこもと

デカメロンもどきにやる気はないのかの。

—ほゝまあ粹狂いろどろしな情人同志、

—粹狂いろどろしとな、それは存ぜぬ

なれども確かに惚れ抜き合つた戀人いろどろしぢや
御意とあらば直ぐ様、覺悟は？

—いつなりと關ひませぬ

色と慾とで騒がうよりかうした芝居が結構、だが人に知れぬが
肝心、されど貴方あなたは—

いや今夜あの元氣なチルシスと
ドリメエヌどのもきつと御座らう
それまで待つてその二方かたのおそばで。

さてももつ氣けの幸、粹狂いろどろしな死を繰りのべて

免がれぬ罪の重荷を除かれた
さてはさては粹狂な情人^{いろ}どちでふるわい。

コロンビーヌ

ふざけものムレアンドル
蚤のやうに叢を

一足飛びに

跳びこえるビエロオ

カサンドルは

ちよつと頭巾のかげで。

騙りものムアル、カンも

また一風變つた風姿^{ふうさ}

狂人^{まぢがひ}じみた

衣裳をひっかけ

眼はぎろくくと

假面^{マスク}の下に光つてる

—Do, mi, so, mi, fa, —

大勢が行き過ぎる

笑ひ乍ら歌ひながら

そして根性曲りの

綺麗な女子^{きれいなをんな}の前で

踊ります。

猫のやうに眞碧な

邪慳なその眼に

ちよつと愛嬌をたゞへて

さもかう云ひさう

『降参

おしよ』と。

——奴らはいつも騒ぎまはる——

いくら焦れよが

定つた運、

かあいさうな

そのなやみを

すこしはお聞かせ！

執念ぶかい女子は

ひよつと裾をば

たくしあげ

帽子に薔薇をおつ挿して

さて欺されやすい人達を

またも自身に引きつける。

地上の戀

ある夜のこと、嵐は公園の小暗い蔭に
いつももの思ひにふけるわたしたちのやうな面かほをして
眼め隠し乍ら小賢こざかしげにも弓もつて
微笑ほくそんでゐるキユピットの像を壊して終つた。

げにその像をくだいたは夜嵐
朝あしたにかけて吹きまくる嵐に打たれて
見るも憐れに壊たれた樹の蔭に
石臺はそれを刻んだ美術家の名を僅かにもとどめてゐるだけ。

なんといふ痛ましきであらうたつたひとつ
その臺座だけが残つてゐるとは、
云ひしらぬ悲しみは深い嘆げきとなつて
ひとの世の暗い行末さへも思ひやられる。

惨ましいことよ、それはおまへ自身の運命ではないか
かくも無惨なありさまに眼を觸れたならば。
よしおまへはいまくるほしい眼に落葉のうへを
紫金しこんの翹で飛びまはる胡蝶を見るにしても。

寂 定

曙の光のなかに静まりて
高き枝葉えだはの影さすうちに
われらの愛を溶け入らしめむ
深きふかき静けさにぞ。

ふたりの胸と心とを
また恍惚の根を植ゑむ
松やしぎと楊樹のおぼろかに
影も衰へたてるなか。

きみが眼まなこをなかば閉ぢ
胸のうへにし手を組めよ
きみが心はいつも夢みて
さまざまの夢をし追はむ。

われら心をゆるし合はむ
きみが足をもおとづれて
岸の芝生に波立たす
優しくゆるゝ風そよの戦まよぎに。
かくて重く薄暮かはたれどきの來るとき

黒き桎かしの枝影暗く落つるとき、
望み絶えたるわれらの歌は
夜の鶯ぞ歌ふべけれ。

悲しい媾曳

人氣なくさむしい昔の公園のなかに
いまし通つた二つのもの影。

ふたりの眼まなこは光りなく、ふたりの唇くちは色褪あせて
わづかに聲こゑがきかれるばかり。

人氣なくさむしい昔の公園のなかに
二つの幻は過ぎた昔をおもひ出でる。

——おまへは昔の楽しい事を思ひ出せるかい？
——なぜ、あなたは思ひ出せと被仰おしやるの？

——おまへの胸は私の名をきく度たびにいまも波うつかい？
いまも私の心を夢にみてゐるかい？ ——いゝえ。

——ああお互くちの唇を觸れ合つた
夢のやうな、楽しい、美しい日、——さうでしたわねえ

— 空は青かつた希望は大きかつた
— その希望はもう逃げました、暗い空へと消えてしまひました
二人は亂れた燕麥かすむぎの畑へと歩み去る
二人の話立ち聴きしたのはこの「夜」ばかり。

幸ある歌

曉のひらけしゆゑに、朝の光の訪おもづれに
 しばらく吾われを離さかりたる嘆もどき覺のぞめし希望のぞこそ
 また吾にかへりきしゆゑ、かつはまた
 ありとある幸福さいはひの吾われがものにとなりしゆゑ。

痛ましき思ひもいまはすでになし
 悪き夢なし、嘲笑あざわふ言葉も閉ぢし唇も
 勝利なき心を語るものはなし。

拳こぶしふるひて悪しざまに罵り合ひし奮激も
 ころなき朝あさけ笑ひもいまはなし
 呪のろはしき怨嗟うらみもいまは消えゆきて
 悪酒あくしゆあふりてまぎらはす忘却さへも既になし。

底知れぬわが夜のうちに吾はいま
 輝きいづる光明の神をひたすら覺かむれば
 不死不滅即頓生の愛の光を覺もむれば
 美と善と微笑によりて冀ふ。

吾いましは汝いましに守られて汝のまゝに導かれ
 優しく燃ゆる清き眼に曳かるゝ手さへ打ち頼ひ

吾は正しき歩みもて石塊おほき細逕も
苔むす路も心おそれず歩みゆかむ。

然なり、正しく穩やかに吾この世をば過ぎゆかむ、
狂暴の心なく、痛恨怨嗟の絶えてなく
目ざす彼方へ運命の我を導くかなたへと。
ああこれぞ喜び勇み闘ひて贏ちうる幸の獲物ならむ。

わが世の旅に快よき眠りの歌を唄ふとき、
吾はかの自由の人の高き姿を歌はなむ。
吾は告ぐ、忌み疑ひのなき歌をきかんことこそ
かくて吾そのほかに美しき天を思ひ見るなし。

II

あさの光はまだ世につかぬ
やれさ曉の明星、

——鶉のむれが
馨香草の花さく叢で歌ふは歌ふは。——

詩人のもとへ訪れよ、
愛に充ちたる瞳もて。

——やれさ雲雀も
お日様も空に揚つてゆくではないか——

暗いおまへの眼をふりむけよ
空はあけぼの

——なんとした嬉しさ。

よく熟れた麥の畑のそのなかに——

それから今度は私の思想を輝かせ

こゝから——づうつと遠くに遠くに！

——やれさ朝露

稊草まいさのうへにも楽しく光る。——

やさしい夢にゆられゆられ

わたしのひとはまだ起きやらぬ。
——やれさ、急いだいそいだ、
そうれ、お天日てんじ様も金に光った、光った。——

III

白い月は
森にかゞやく、
枝々のあひだから
緑の葉蔭に
さゝやく聲がする……

おゝ戀びとよ、と。

かゞやく池水は

底深い鏡のやう、

まっ黒な

柳の影を

風はしのび泣く。

ふたり
二人夢みるはこのとき、

ひろく優しい

しづけさは

虹のやうに亂れる

星の空から

おりてくる。

なんといふこの夜の美しさ。

IV

馬車の窓から眺める野原の景色、

馬車は狂ほしく走り過ぎる、ひろびろ廣漠とした野も川も

森も麥の畑もまた蒼空もあざぞら

凄まじい嵐のなかに飛んでゆく。

電柱は陥つこつちるがやうに、また電線は
不思議な花押のやうに亂れ乍ら後に過ぎる。

燃え立つた炭火の匂ひかたぎる水の音か、
幾萬の魘魅が鞭うちしきる鎖のごとく
吠えたけるそのもの音の恐ろしさ、
そのなかにする鼻の長い啼聲。

——しかしこれらのものもみんな私の眼の中に
わたしの心を怡ます白銀の夢があるためか
またいまも瞬いてゐるあの優しい聲のあるためか……
戀しい人の名をよべばかくも氣高くかくも響いて

廻る車輪の心捧の荒だゝしい轍の音さへ
私にはこんなたのしさうにきこえるのであらうか。

V

煖爐のわき、燈火の狭い灯かげ、
額に指をあてゝ夢みるやうなものおもひ、
戀人の瞳をみてゐるとそのなかに吸はれてゆく私の瞳、
お茶も煮え、書物もふせて
日の暮方を感じる優しいころ、
ころもちよい疲れと、さし込んでくる影と、
優しい夜を待つてゐるころ。

あゝこのやうなものこそ、あらゆる空しい翹望のなかに
飽くなく覺めたわたしの夢だ、
あゝ幾月かの待ち焦れ、幾週間かの狂ほしい期待。

VI

われらふたりの喜びを妬ましげにも語り合ふ
嘲け笑ひも蔭口もこゝろにかけず、
いつもたゞ寛きこゝろにまかせずや。

いと楽しくいと穏やかに肅ましき
路のなかにし笑ひつゝ希望を常に現はさむ、

われら二人を解せざる人のありとも何かせむ。

暗き林にあるごとく愛のなかにも孤獨にて
二つの胸は平和なる優しさにこそ醸されむ、
夜の鶯の夫婦づれ薄暮かけて歌ふごと。

世のひとのつらくあたるも優しくも
なにか吾らにかゝはらむ、吾ら足れりき。
願くば愛の心に彼方へとめざし挽まず進みゆかむ。

いと強くいと親しき連鎖もて
またそのうへに固き冑鎧を身に持ちて

吾らはいつも微笑まむ、またいさゝかの恐れなく。

運命のいかに吾らをさばくとも煩わづらひもなし、

たゞ吾らひとしき歩みをつゞけゆかん、

手をうちつれてたゞふたり心こころ嬰兒の如くにも。

VI I

これ夏の日の誇りなり、

輝きらきしきる太陽は我が歡喜よろこびと連れり、

繻子しゆすと素絹すけしのかゞやきに

きみが親しき美しさいまなほ褪さめずありつらん。

濃碧こぞをの空は高くかゞげし天幕あまばりか、

その長き襜ひこねこ驕ひこねこらしく打ちふるふ。

やがて日か翳かげる幸多かきふたりの額ぬかに、

幸福と期待のこゝろに。

その夕暮のきたるとききみが翼の片かげに

空はたゆしく睦み戯れ愛に充ちなん。

かくて優しき星の眸は

親しげにわれら夫婦ふたりは微笑まむ。

無言の歌

忘れられた小唄

I

曠野のなかに吹く風は
その息吹をもかじます

——ファヴァール——

こはもの倦げの夢心地
こは愛しさの疲れなり、
こは微風に抱かれて
顫ふ木立のそよめきか、

こはおぼろなる枝ごとに
さよやき交はす歌聲か。

囀り交はし鳴きかはす
もろくさやかなの囁きよ、
風の息吹に揺る草の
優し響に似たらまし、
君は語らむ早瀬の下の
小石の重き揺めきと。

夢見心地の嘆きにも
悲みつくす靈は

吾らのものにあらざるや、
わがものにして且つ君のもの、
かく思はずや。いと低く微温なまぬかき黄昏たそがれに
溶けもゆくかの肅つひましき讃頌ほめうた歌よ。

II

吾は知る、その瞬きのうち、
昔の聲の妙たにしみらの響こそ。
音楽の光りのなかに、蒼ざめし戀の中にし
今ぞ來らむ曙の光をこそ。

惑亂のわが心と胸は

二いろの眼もて眺むる如し

狂ほしき日のなかに打ち震ふ

歌こそあゝあらゆる琴の掻き鳴らす歌こそ。

青春と昔の時に揺りにし

君に肩かす親しき戀は

ひとりさみしき死もて徂ゆきけり

ああ今しそのしいそらぞ打ち絶えぬ。

III

雨はしづかに巷にそよぐ

—アルチユウル、ランボオ—

巷ちまにに雨のふるとく

涙ながるゝわがこころ、

胸のさなかに沁み入りし

このなやみこそなにならむ。

雨はしづかに巷にそよぐ

ああ土に屋根のうへに

いとも優しき雨のひびきよ、

疲れあぐみし心ゆゑに

ふりもぞよぐか雨の歌。

えたへぬほどの厭はしき

胸は故なく涙する、

叛そむく心もつゆなきに

鬱ふさぐおもひは何故ぞ。

何故とこそわかちえぬ

辛つらき痛みの堪へがたし、

愛も憎みもなきものを

なぜか心は悲める。

君よ吾らにあらゆる物を宥さなむ、
かくしてぞ幸福は吾らに聚らむ、
吾らの生に悲しき時の來るとき
吾らなほ二人嘆きてあるべしや、君よいかた。

吾ら打ちとけて姉妹の心もて在らむ、
掻き亂されし吾が願望をば幼兒の優しさに
あらゆる男女より遠ざかり歩まむかな
かくて吾ら新しき忘却のなかに放たれむ。

吾らは二人幼兒にて二人の若き娘にて
いつも眞に熱中しまことに驚く心もたむ、

その宥されしをも知らぬげに
たゞ清き垣根の下を心蒼ざめ歩みつゝ。

V

かぎりなきかの歡びはうち鳴らすピアノなり
——ペトリニューボレル——

纖弱き手もてうち觸るゝピアノの音
朧ろに暗き薔薇色の薄暮どきに輝けり、
さはあれいとも輕やかなの羽音もて
昔ながらのひと節はいと脆くいと魅はしく、
恐るゝごとき氣はひもてひそやかに、
彼女の移り香こめし化粧の間にぞ鳴り響く。

静やかにこの憐れなる身を揺する
思ひもかけぬ眠りの歌は何ならむ
めづらかに優しきひとき何をか吾に求むらむ、
きよとれがたきその最後の繰返句は
こゝろもち少き庭園にはに打ちひらく
窓の隙より消えゆくものを。

VI

つらやかなしやわがこゝろ、
これもひとりの女ゆゑ。

いつそ思はず離れてをれば
氣も浮き立たぬ所在なき。

胸のおもひも心のほども
女ごころをよそにはすれど。

いつそ思はず離れてをれば
氣も浮きたゝぬ所在なき。

あまりか弱なわがおもひ
こゝろにきくはそれでよいのか。

「それでよいのか」さてもいたまし
別れのつらさ身のつらさ。

心は胸に答ふらく
なんてしらうぞ心でさへも。

思ひ思はぬ二みちに
しのぶ戀路のしよんがいな。

VII

かぎりなき倦怠の
曠野のなか、

そこはかとなき雪
砂のごとくきつめ煌く。

空は銅色にして
光りもなし、
生けるがごとく
死せるがごとき月の色。

暗き雲のごとく
たな曳く霧のなか、

ま近き森の樫の木立は
灰色におぼろめく。

空は銅色にして

光りもなし、

生けるが如く

死せるが如く月の色、

息苦しげに啼く鳥、

また汝瘦せたる狼

惨ましき北風に打ちつれて

いまし汝にくるは何ものぞ。

かぎりなき倦怠の

曠野のなか

そこはかとなき雪

砂のごとく煌く。

VIII

高き梢の上にとまりし鶯は自らをそこに見出でて小川
の中に落ち込みしものとおもひき。彼は樫の木の頂き
にありながら自ら溺れんとする恐れをもてるなり。

——シラノ・ド・ペルジュラック——

霧たちこむる小川のうへ林の影は
煙のごとくかき消ゆる、

さはあれ、大氣のなまことの枝のなかに斑鳩いかるがは嘆くなり。

あゝ旅人よ蒼ざめしこの景色は

きみの姿をいかばかり蒼ざめて示すらむ、

高き葉かげにぞ悲しく嘆く

きみが溺れし希望のぞみこそ。

水彩畫

みどり

こゝに木の實と花があります、葉と枝とがあります。
それからあなたばかりを思ふ私の胸があります。
どうか、あなたのその白い二つの手でそれを攪き亂さない
で下さい。

美しいあなたの眼でこの貧しい賜物を甘くして下さい。

朝の風が私の額に涼しく吹き、

私はいまもなほ露に濡れてをります。

あなたの静かな足許に私の疲れを休まして下さい、

その休まる束の間を懐しい束の間を夢みてをります。

あなたの若やいだ胸の上に私の頭を置かして下さい、
私の頭にはあなたの最後の接吻が響いてをります。
幸福な嵐からのがれて休まして下さい、
あなたが休んでから私もちよつとばかり眠りませう。

戀ひわづらひ

薔薇はほんとうに眞紅で

葛はほんとうに眞黒でした。

ねえ、あなた、あなたがちよつとでも動く
とすぐ私の悲嘆は蘇ります。

空はあんまり青くあんまり優しく

海はあまりに碧に空気は餘りに甘うございました。

私はいつも恐れます——蟲が知らせるやうな一つのことを
あなたからむごい目に逃げられることを。

漆のやうな葉をした柵青に
耀いた黄楊の樹に私は倦きました。

かぎりない郊野にすべてのものに倦きました
けれどたつたひとりあなたの丈けには。

巻の歌

I

*ジツグをひとつ踊りましょ、

わたしや何より汝そなたの眼もと、
可愛い眼もとに惚おぼれ込んだ、空の星より
なほ光る、ちよつと小憎こにくなその眼つき。

ジツグをひとつ踊りましょ、

見すぼらしげな情人こひびとは

垣間みてさへ氣の引けさうなその風姿かざり、
ほんに優しい惚々ほろとするその姿。

ジツグをひとつ踊りましょ、

とは云ふものゝかゝる汝そなたが
私わたしの胸で死んでから花の脣くちもる接吻くちづけに
いつも心は引かされる。

ジツグをひとつ踊りましょ、

わたしや今でも思ひだす
ありし昔を、さては二人の陸語を、思出ぞ
これがせめてのわが財寶。

ジツグをひとつ踊りましょ、

*急速なる調子の舞踏

II

街のなかなる小川こそ
ものおもはしき風をして

五尺に足らぬ壁の後を
音もたてずに流れゆく。
川波は濁れるうちにかつは澄み
平和なる市の郊外へと流れ行く。

水の流れはいや廣く、
黄色に染みて『死』のごとし。
水嵩増して希望絶え
霧に影さすものもなし、
朝の光りの田舎家を
黄色に黒に照らすとき。

あはれなる若き牧人の歌へる

吾は接吻くちづけを恐る、
蜂のごとくに、
吾は悩み休むことなく
眠らでありぬ、
吾は接吻を恐る。

されど吾は愛す Kateカイトを、
その歡ばしき瞳を愛す。
彼女は優し、

その蒼ざめし長き面おもざし、
吾はいたく Kateカイトを愛す。

聖サン和ヴァ天連ランタンの日なりき
その朝に打ち明けらべきを
吾は敢てせざりし
げに恐ろしや、
南無聖和連天！
サンヴァランタン

彼女は吾に許しぬ、
快こころよく、心強く
されど誓言ちかひの傍に

戀人とあることこそ、
心惹けたる限りなり。

吾は恐る、接吻を、
蜂のごとくに。

吾は悩み休むことなく
眠らでありぬ、
吾は恐る、接吻を。

ひかり

爽やかなる風、晴れ渡る空を吹くとき

彼女は滄海の波の上にも行かむと乞ひぬ
吾ら互みに睦み合ひもつれ合ひ
水脈引く海をかしこに進みぬ。

穩かに平かなる空の上、太陽は高く輝き
黄金なす髪こがねの毛げに金きんの光は照りかへる。
吾ら日の歩みと伴りていとも靜かに
蓋はるゝ心の影を打ち開く、あゝ歡ばしきかな。

白き鳥あたりをゆるやかに飛びまはり
その翼やがて遠く白銀しろがねに傾きぬ
あるときは大きな藻の屑くずの長き流れる列りて

底深くおほらかに動めけば吾らが足も打ち震ふ。

彼の女は顧みて何ごとか氣にかゝる

優しき不安げの面差をあらはしぬ、

されど吾ら選まれし身の喜びを思ひみれば

かの人も背きてその頭をば高くさゝげぬ。

ドオバア、オスタンド間

ラ・コンテツス・ド・フランドル號にて

千八百七十三年四月四日

智 慧

II

日もすがら照り輝きし徒らに美しき日も
いまこゝに臨終りんじゆうの銅色あかねいろに戦けり。憐れなるわが靈よ、
眼めを閉ぢよ、夙とく立ち還れわが靈よ、
悪念あくねんの誘ひを不淨の心をば逃れよ。

日はひねもす長き焰の雨とかゞやき、
丘の葡萄に照り映はえて平地ひらちの畑に薄れゆく。
かくて青き蒼空あそぞらをしも蝕くばめば
その空は嘆きの唄を歌ひ出づ。

あはれ蒼ざめ君に来るか、緩ゆるやかに手を連れて。
あゝいかにせむ、昨日きのの日の吾が美しき明日あすを食はむとき、
古き日の狂亂きやうらんのなほも路上じやうじやうにのこる時。

かゝる記憶おぼひでみなすべて打ち絶やすべき時なりや、
恐ろしき一撃いちげつよ、終焉しゆうげんよ、まがふ方なき最後さいごよ、
あはれ、あはれ、恐ろしき暴風雨あらしのために祈りをば捧げよ。

III

ルイ・ラシーヌの如き智慧をば吾は忌む、

ローランの教へに仕ふることなかれ、
また類唐の大御代（おほみよ）に生るゝなかれ、
落日のかくめづらかに生（いのち）をば鍍金（とまん）するとき、

メントノンの爛熟（らんじく）に達せる佛蘭西の上に
麻（あし）もてつくりし頭布（こあふつ）の優しき影と平和をば投（な）ぐるとき、
寡婦（やもめ）と孤兒（みだれこ）とを王侯の恵（めぐみ）にぞ濕（うる）すとき、
祈禱（いね）の書（ふみ）いつも心に讀（よ）まるゝとき、

詩人と博士とは素朴（すぼく）に善良（じやうりやう）に、
修道女（しゆどうむすめ）の眞心（まごころ）もて聖體（せいたい）を授（たま）るとき、
虔（けん）ましく彌撒（みさ）まつり、會式（かいしき）の中に歌（うた）ふとき、

かくて春來（はる）ればリラと薔薇（ばら）を摘（と）みとりに
オ、トウイユの中（なか）に行くべき優（やさ）し勸告（くわんこ）に與（あ）らむ、
ギヤロオの如（ごと）く何（なに）ごとにも神（かみ）に祈（いの）を捧（た）ぐべく。

IV

否（いな）とよ、そは佛蘭西國教の精神、その時代と宿命論者（しやうめいろんしや）のためなり、
宏大（おほい）にして優雅（えいあ）なる中世（ちゆうせい）へと赴（おもむ）くなれ、
わが心は邪淫（じやゐん）の教と悲しき肉體（にくたい）より離（わか）れて
すぐる日の舵（か）をばとどめざるべからず。

王と政治家と僧侶と工匠と化学者と

建築家と兵士と醫師と辯護士と、

何の時ぞや、燃え熾さかんなる従順にして藝術家らしき

渾心こんしんの力もてわが破れたる胸は再び進めざるべからず。

そこに吾の羸かちうるものは何ぞ——王位高官

何の價ぞ、たゞ生き生けるものにしぞあれ、

吾は善行と正思との聖者たらむ。

高き教理と謹嚴の徳と祈禱の翼もて、

たゞ十字架にたよる唯一の熱狂に守られむ、

おゝ狂ほしさに充てる寺院よ。

V

きけよ、かの優しき歌を

君が心を歡ばすほかに嘆かぬかの歌を

そは肅つしましくして輕やかに

苔を流るゝせゝらぎか。

その朗音ほろりはきみも知る(はたや親しき)聲なるを。

あはれ侘わびしき寡婦あやめとも

いまは面紗につゝまれぬ、

されどそはなほ驕りあり。

秋の微風にはためける
而紗の長き襜のうち、
をのゆく胸に「眞實」は
星の如くも隠見す。

その覚えある聲はいふ、
善はわれらが命なり、
憎悪にくしみとまた嫉妬ねたみとは
身にとゞまらず死は來ると。

そはまた語るあかく思ひを打ちすてし

心おきなき生活の怡よろこびを、
そはまた語る金婚うたげの宴うたげをさては
勝利なき平和のかくも心優やさしき幸福さいはひを。

飾りなき嫁エビタラムぎの唄うたのその中に
いつまでも永ながらふるその聲こゑをこそ摘つみと取れよ、
げに悲かなしまぬ心持こころもちつより靈たましひに
まさされるものはあらざらむ。

忿いかりることなく耐たへ忍しのぶ心こそ
『苦勞くるしみにありて』なほ且かつつ『世を過あやしゆく心』なれ、
かくも明るき教しよへはもいづくにあらむ！

きけよ、かの賢き唄に。

VI

かつては吾のものなりし慕はしき手よ、
まこと可愛ゆく、まこと美じきいひ掌たなごよ、
人間の愚かしき過あやまちよりぞものみなは
異教徒のものとなりしか。

港や磯のもの蔭に、

諸々の國々のものかげに、

王侯の時より増りなほも氣高く

その慕はしき手は吾に夢をぞひらく。

夢みる掌たなご、わが靈を抱く掌、

罪をおかせる苦患の中に

眩暈めくらめき打ち倒れたる魂に

きみが語るをいかで知りえむ。

あゝわが清き夢をし、

靈の交はりをし、

母らしき圓滿をし、

親しき宏き愛情をしもその掌は欺くべしや。

いとなつかしき痛ましき、いと良き嘆き、
幸はふ夢路、聖き掌、

あゝこの尊き掌

吾をば宥恕す手振りをする。

VII

吾は夢みぬたゞひとりの嬰兒をば

その嬰兒ぞわが胸にいや果の傷みをば開くが如し。

願ひ求むる死を吾にその慰の日を吾に

おくるが如く思はるゝいとも激しき傷みをば。

その鋭き征矢とそのいと堅き冷たさよ、

その尊き瞬時にこそ疲れたる

不安に重き夢は覺まされ

わが身につたふ基督の血は清き歌をば唱ひたり。

吾はいまもきけり。いまも見たりき。かくも優しき本義の教を、

かくて吾、その見きくものをば知れり。

吾常にきゝまた見たり、無我を、良き心の聲を。

また未來を、智慧と寂靜を

吾爾を愛しえむ、爾は美しく可愛ゆき手もて

われらの眼をば閉ざすにあらずや。

VIII

聲

アナトオル・フランスにおくる

驕慢の聲、それは角の如く強き叫ひ

黄金の鎧の上に血潮なす星屑、

一度は鐵火のなかに蹉跌けど

終にその聲は過ぎゆく、角の音の如く。

憎惡の聲、それは僞瞞に充ちたる海の鐘、

静かなる雪ふる中に轟き、冷く、重く佗しき

あまりに憊くまたもの怖ぢしたる生命は

堤の上、なほも轟く、鐘の音の彼方にあり。

肉體の聲、それは疲れたる巨大の喧噪、

亂酔の人、楽しく見ゆる巷、また眼、名聲、

また毒に満ちたる空氣は

その疲れたる巨大の喧噪に死なむとす。

見知らぬ人の聲、それは霧のうちを杳かに響く、

去りまた來る遊樂、不安の堆積、奸計。

婚宴の場のヴィオロンの足どり低き調べにをどる。

あらゆる文化の圓形競技場

忿怒、暗き嘆息、悔悟、また誘惑、
誠實なる静寂に聾せんとせば
吾らこれらに聽かざるべからず。
忿怒、暗き嘆息、悔悟、また誘惑。

ああ諸々の聲よ、死ねよ、すべて死ねよ、
箴言と無意義の言葉と悪業の表象と
あらゆる辭句を罪惡よりぞ放たしめよ、
あゝ諸々の聲よ、死ねよ、すべて死ねよ。

吾らもはや汝らの求むるものにあらず、
吾らに於て死せよ、力ある言葉の優しみを嘯む

匿れたる敬虔の願望に死せよ。

吾らの胸はすでに汝らの求むるものにあらず。

天に求むる祈禱の聲のうちに死せよ、
その聲のみぞ扉をば開けかつ閉ぢて
最後の日の印章をば手にぞ握らむ、
その祈禱の聲のうちに死せよ。

ああ愛の畏るべき聲のうちに死せよ。

IX

古き代の人の精神は飾りなく
悲劇のうち、え堪へぬ痛苦のたゞ中に、
または身の不運の際の驚愕に
その時にこそ現はるれ。

そのかみのいと朗かの藝術に
描かれたる悲劇の際の母の姿
そこに二つの典型ありて
おなじ情緒を齎せり。

おのが兒らを劍に刺されし
かの老いしトロヤの國の太后、
もの荒れしその葬列の叫びごゑ
海を渡りて響きけり。

後は濱をひた走る、
あらがふ聲は潮騒のどよむ彼方に
渦巻きあらび、かまびすし、
まこと文に書かれし牝犬の如くにも……
また己が兒を神々に

殺されにたるかのニオベ

まばらに敷ける石のうへに

眼をかたく見張り、驚くさまに見よ。

その唇に引きつくる臨終の息に

狂へる人の態なしてうち絶えぬ。

いづくと知れず運ばるゝ

痛ましき大理石の像に外ならじ。

わが基督教の悲しみはまたいや深し、

人間の胸もつマリア、

悩みに忍び、心に思ひ

またおだやかに道を追ふ。

聲立てず涙に充ちて彼女は立つ、

かのカルベリの山のうへ、

彼もひとしく母の身なれど

あゝさはれいかなる母ぞいかなる兒ぞ。

彼女もまた死の十字架の苦患をば

世のひとの救霊のために身にぞ負ふ、

その宏大の情ある

犠牲こそは泣かれぬれ。

世の人を、その疲れたる身の上を
わがをさへど嬰兒とおもひなし、
そのいや果ての胸の上、七の傷みに
水と注ぎし慈悲のこゝろ。

ああ終にうち開かれし神の榮光、
正しく清き信仰に
たゞ一つ邪惡の心除きたる
善に、優しき心に。

人々は永遠の歡喜よろこびへ
かのシオンの丘の上へと、

アッンアッン被昇アッン天祭アッンにさづかりし
清き翼にのり行かむ。

II

I

あゝ神よ、爾は愛をもて傷け給へり、
その傷みいまなほ吾にをのゝけり、
あゝ神よ爾は愛をもて傷けたまへり。

あゝ神よ、爾は恐懼おそれもて吾を打ち給へり。

その烙印ぞいまなほこゝに癒えがたし、

あゝ神よ爾は恐懼もて吾を打ちたまへり。

あゝ神よ、吾はすべての虚しきを知りぬ、

爾が榮光ぞわが身にそゝがれし、

あゝ神よ、吾はすべての虚しきを知りぬ。

願はくば爾が酒の流れに吾を溺らしめよ、

爾が卓つとの上なる麴ペンにわが命をば建て給へ、

願はくば爾が酒の流れに吾を溺らしめよ。

こゝに吾の流さざりし血潮あり、

こゝに吾の痛みに堪へぬ肌膚あり、

こゝに吾の流さざりし血潮あり。

こゝにわがうら恥かしき額あり、

慕はしき爾が足に跪くべく、

こゝにわがうら恥かしき額あり。

こゝにわが働かざりし腕あり、

燃ゆる祭火ほのほとめづらかの香爐かろを焚くべく、

こゝにわが働かざりし腕あり。

こゝにわが空虚むなしさにのみ浪うちし胸のあり、

カルバリの荆棘おとろのなかに息づくべく、
こゝにわが空虚にのみ浪うちし胸のあり。

こゝにわがたどくしげの足はあり、
爾が愛を叫びつゝ爾がもとに走るべく、
こゝにわがたどくしげの足はあり。

こゝにわが厭いとはしき虚偽いつはりの聲はあり、
懺悔の境に近づくべく

こゝにわが厭いとしき虚偽いつはりの聲はあり。

こゝにわが罪にかゞやく瞳あり、

祈禱いのりの涙に消されうべく、

こゝにわが罪にかゞやく瞳あり。

あゝ爾、供物くもつを覓ゆめむる神贖罪ゆるしの神、
わが不義不忠の坑つなはいくばくぞ。
あゝ爾供物を覓ゆめむる神贖罪ゆるしの神。

畏怖おその神、清淨きよの神、

あゝわが罪業ふちせの暗き深淵ふちよ、

畏怖おその神、清淨きよの神。

あゝ爾、平和やわらの神歡喜よろこと幸福しあの神、

吾がありとある恐怖よ、無智よ、
あゝ爾平和の神歡喜と幸福の神。

爾はすべてを知れり、すべてを知れり、
あゝ吾いかに何人よりも貧しきぞや、
爾はすべてを知れり、すべてを知れり。

あゝされど吾、爾にわがすべてを捧げむ。

II

わが聖母マリアのほかに吾は愛せじ、

そのほかの愛はたゞ吾に強ゆるのみ。
わが貧むるはわが聖母げに聖母のみ、
親しき胸に愛の焔をそゞぐなり。

彼女の爲には吾わが敵をも愛せむ、
彼女のためにはこの一身をうち獻げ
優しき心に熱きおもひに奉仕へまつらむ、
かくも吾誓願せしを彼女は許しき。

吾いまだ心弱く悪念に驅られしとき
手は倦く眼路上に眩みしとき
彼女はわが眼に接吻しわが手をば抱擁きぬ。

彼女はげにいとも氣高き言葉もて導きぬ。

吾この痛みをも辭せざるは彼の女のためぞ、
五つの災禍わざひにわが胸を任せしも彼の女の爲ぞ、
かくてこの良き精進ぞ十字架すがまに養垣すかまのかたに
吾かくも祈りし時彼女は吾を勞はりぬ。

吾が聖母マリアのほかは吾は思はじ、
智慧の住家贖罪ゆるしの源げにもまた
わが佛蘭西の母なれやわれ待ち望む、
祖國の上に神の榮光限りなきことを。

汚穢すがれに染まぬマリアよ愛の源よ、
生き温き信仰ぞ命いのちなる。

あゝ吾爾を愛することのなほも難しとなすや、
たゞひとり爾をのみ愛して天國に近づくべく。

III

その一

神吾のたまに宣へりわが兒よ吾を愛せよ、
汝は見むわが腋は貫かれわが胸は血に染みて輝くを、
マグダラのマリアが灑ぐ涙もて傷める足は濡れたるを、

またわが腕は秤錘かりの下に惱めるを。

汝の罪とわが手と、あゝかくて汝は見む十字架を
また釘と膽汁スポンジ海綿とを。かくてそれらのもの
汝をば愛に導き悶え多きこの世にありて身を支ふるは
たゞわが肉と血とわが言葉と聲にのみたよるべきを。

吾わが死に至るまで汝を愛せざりしや、
わが天父ちちの下なる同胞聖靈はたらの下なる我が兒よ、
吾果してこゝに記せし苦悶なやみをば受けじとなすや。

吾汝がいと苦しき時に嘆かざりしと云ふや、

汝がなやむ夜半に吾汗を流さざりしといふや。
わが在所ありかをば求めて心惱めるわが友よ。

その二

吾は答へまつりぬ、主よ爾はわが靈に語りぬ、
吾爾を尋ねて爾を覚えざるは眞實まことなりと。
さはれ吾爾を慕ふ、願はくば吾下われしたにあるとき吾を眺めよ、
いつも火と燃え熾る愛の神なる爾よ。

渴きもとむる平和の源もとなる爾よ、
あゝしばしわが悲しき戦鬪たかひのさまを眺めよ、
吾この卑しき血に染む膝を曳きずりて
いかで爾が清き歩みの痕あとを追ひえむ。

さはれ吾久しく爾をば索り摸めぬ、
吾爾にわが汚辱をばいさゝかは身に持つ影を求めけり、
されど爾はいさゝかの影だにあらず、あゝ湧き上る愛の神よ。

ああ爾静かなる泉よ、罪を好みて罪を覚むるものにのみ
苦味を與ふるわが神よ、あらゆる光の源よ、
夜の接吻に閉ざさるゝ眼も安らかなの平和よ。

その三

吾を愛せよ吾は普き接吻なり
吾はその眼瞼にしてまた汝が語る唇なり、
おゝわが親しき病人よ、汝を揺する

その熱病ぞ吾には絶えじ、汝敢て吾を愛せよ。

さなり、わが愛はすこやかに登りゆく
山羊の足どりおぼつかないの汝が愛の、登りもえざる彼處まで
兎追ふかの荒鷺のごとくにも汝をはこばむ
蒼空の碧滴る青草山の彼方へと。

あゝ明るき夜よ、汝が眼はわか月光の中にあり、
あゝ光りの寢床、さ霧のなかの水の音、
この心無き穩かさ、あゝこの憩ひの床。

「愛せよ」「吾を」「この二つの言葉ぞわが至上の言葉なれ、

全智全能あたはざるなき汝が神なれば吾かく望む、
さはれ吾始めより吾を愛し得べしとは望まざり。

IV

主よ、御言葉ぞ吾には過ぐ、さはれ、吾はなしえじ、
吾誰をか愛せむ、爾をか、否、吾は身も顛ひ何もなし得ず、
あゝ吾爾をば愛しえじ吾はもはや何ものぞまず、
吾は痴人なり、爾は清き愛の風に花咲く薔薇。

ああ爾はあらゆる聖者の心をもてり、嘗て
イスラエルの怨嗟なりし爾よ、半ば閉ざせる汚れなき

たゞ一つの花の上に身をば置きにし清き蜜蜂、
あゝいかでいかで、吾爾をば愛しえむ。

そも爾狂へりや、父よ、子よ、聖靈よ、吾はたゞ漁る人
ものに倦み氣は傲り悪をばおのが務めにす、
かくて見、聴き、味ひ、感じ、嗅ぎまはる五感のなかに覺めえず。

またその靈にさへ——あゝあらゆる希望と
あらゆる嗟嘆のなかにさへ、覺めえず——
さるをいかでか誰が古のアダムが抱きし恍惚を與ふとや。

V

汝吾を愛せよ、吾は汝が語りし如き狂者なり、
 吾は古き人をば食ふ新しきアダムなり、
 汝が羅馬、汝が巴里、汝がスパルタ、また汝がソドムよ、
 そは恐ろしき迷宮に投げ入れられし憐れなる人の如けん。

わが愛は未來永劫邪淫の肉を焼き燼す炎なり、
 また燻香のごとくも立ちのぼる靈氣なり、
 また吾が播きにし惡しき胚種をば
 その波におし流す洪水なり。

わが死の十字架ぞ建てられし日の爲めに
 怖るべき慈悲の奇蹟の力もて吾が中に
 畏怖と克己を努むるを吾汝に勸む。

愛に來れ、汝が夜を逃れて愛に來れよ、
 そはわが永遠の心なり、棄てられし憐れなる靈よ、
 汝吾を愛せざる可からず。こゝに在るたゞひとりの吾をば。

VI

主よ、われは戦けり、わが靈は氣を失ひぬ

吾心より爾を愛さんと思ひ立ちけり、
されど、この吾のいかにして爾が愛人となりうべき、おゝ爾神よ
正義は善の道義は身を慄はすにあらずや。

わが心はその柩をば埋むべき塚穴に
なにか色めき、吾がうちに蒼空は
その色ふかく充ちくるを感じれど吾爾に問ふ。
あゝいかにして、いかなる道かそこにありて爾と吾とを連ぎうべきや。

願はくば汝の手をば借したまへ、
吾この屈める肉體とこの病へる心とを起たしめむ、
さはれ、いつもその御天をば仰ぎうべしや。

爾が胸のなかに、あゝ吾らのものとなりし爾が胸の上に
この御天をば復た見うべしや、
あゝかの聖き使徒の頭やすむる彼處にぞ。

VII

わが兒よ、汝寔に努め覚むるとき吾は諾ふ、
吾こゝにあり、故しらぬ愚かしきをば汝が胸よりとり去りて
わが宗門にと打ち開くこの腕にぞ來れかし、
百合の花にと飛びきたる蜂のごとくに。

わが耳に近づきて勇ましき真心に
跪きたるおもひをばあかず語れよ、
己れを傲め己れを隠す言葉なくありのまゝをば語れかし
いとも優れし悔悟の花束を吾に献げよ

かくて心措きなく飾りなくわが食卓に來れかし、
そこにわれ天の使も口にせざりし
こよなく旨き饗をもて汝をば祝せむ。

汝はそこに汝の血をば不死に嘯くむ
力と愛と善の心のいつも變らぬ
葡萄の酒をば飲み干さん。

おなじく

かくてまた、吾汝の肉たり、心たる
この愛の不可思議をもてつゝましく守れよ
またいつも渴き濕ほす酒をもとめて
夙くわれが家にとかへり來よ。

惡を企む心なきパンをもて
わが天父に祈禱をさゝげ、またわが聖母に
抱かれんとて嘆き求むる心あらば
地を離れてその中に毛皮與ふる、いにしへの羊の如くあれよかし。

麻の衣と「無我」をば着たる嬰兒たれ、

汝が儂^{ほかな}き自己の愛と、生れの儘の心とをうち忘れ、
やがては少し我が面影に似るべくも心せよ。

吾が惱みは今もかはらじ、かの古のヘロデの世にも
ピラトの世にも、はたユダとペテロの時にも
嘆き悲しみ殘虐の死にぞ逢ひしは今もかはらじ。

おなじく

えも云へぬ悦^{たのしみ}樂に充ち溢^みてるこの道に
汝が勇ましき門立^{かどたち}をなせし酬いに

吾汝をして新しきものをば地に味はしめむ、
胸の平和貧^{やはら}しき心の愛、また不思議なるわが黄昏^{たそがれ}に。

靈のいと静かなる希望^{のぞみ}にぞ開くとき、
かくてわが誓言^{ちかひ}に従ひ永遠の聖盃^{さかづき}に飲み干さむ、
かくて月けざやけき蒼空に
また薔薇なす朝に夕に鳴りひびく鐘の音に。

わが光明のなかに聖母被昇天祭^{ラツムマフシオン}を待ちのぞみ
いつも變らぬ慈悲の中にし目覺めつゝ
永遠に吾が讚頌^{まめうた}樂のなかにあらなむ。

かくてまたかぎりなき恍惚と智慧の心と
汝が苦痛^{くるしみ}のあどけなき訴言^{かたご}をもて「吾に」在れ。
いつまでもいつまでも吾がものたれ。

VIII

あゝ主よ、吾何とせし、吾涙に濡れてこゝにあり、
かぎりなき歡喜の涙に濡れてこゝにあり、
爾が聲は幸福と痛苦とを一ときに齎らせり、
されど痛苦も幸福も吾には同じ魅力あり。

われは笑ひ、吾は泣けり。

戦ひの喇叭ぞ戦の場に鳴るごとく。

吾は見る碧と白の天馳使楯をばかたく身に纏ひ

その喇叭の響ぞ我をして恐ろしき號令に目醒ましむるを。

吾は限りなき恍惚とかぎりなき恐怖とを身に持てり、
吾は痴人なり、されど吾爾の寛恕を知る、
あゝ何たる力、さはれ何たる勇氣ぞ、かくて吾こゝにあり。

心貧しき祈禱もて胸は充つれどなほかぎりなき困苦は
爾の聲によびさまさるゝ希望の心をかき亂す、
あゝかくて我戦きつゝも息づけり。

IX

——憐れなる靈ぞ。かくの如し。

III

I

希望は厩の中なる藁の芽の如く輝く、

狂へる翼に酔ひしれし蜜蜂のごとくも、何ゆゑに汝は躊躇へる？

見よ、太陽は戸の隙より、今日もさし入り、塵を光りに浮き立たしむ。
卓のうへに眩つきて汝はなにゆゑに眠らざりしぞ。

あはれなる蒼ざめし靈よ、せめてこの凍りたる水を飲め、
かくて睡れよ、たゞひとり、われは残らむ、

吾はきみが晝寝の夢を心より愛さむ。

かくて君は搖籃の嬰兒の如くも唄ひいでむ。

正午の鐘なりぬ。マダムよ願はくば去り給へ、

彼は眠れるなり、貧しく不幸なる脳髓には

女人の歩みさへ恐ろしく氣づかはるべし。

正午の鐘なりぬ、吾は部屋の中を水もて清めたり。

ねむれよ、希望は岩窟の中なる石塊の如くも輝く、

——あゝ九月の薔薇、復び花を着くる時にし。

II

吾はきたりぬおとなしき孤兒みえしごの
たゞもつは静けさに充ちたる瞳もて、
大都市の人々のたゞ中に來りつれど
街人まちびとは吾の惡をも知らぬ氣げなり。

二十才はたぢのころのおろかしさ、身に知らぬ
戀の焰の狂ひゆゑ世の女らを
美しとのみ思ひ信ぜしおろかしさ、
吾おもふ心つゆなき女らを。

たとへ祖國くになく、王はなくとも、
勇猛に富みたる心乏しくも、
戦いくさの場に死なむと思ひき。
されど死はこの吾を欲りもせざりし。

吾は餘り早くかあまり遅くか生れきたりし、
この世にわれのなせしは何ぞや。
あゝ君よわが悲しみは限りなし、
願はくばこの憐れなるガスパアルのために祈れよ。

III

暗く果しなき眠は ねむり
わが生いのちのうへに落つ、
ねむれよすべての希望のぞみ。
ねむれよすべての怨嗟ねたみ。

吾はいま何もえ知らず、
吾は記憶を失ひたり、
善も悪も……
あゝ悲しき人の世の一生。

IV

吾は搖籃ゆりかごなり、
塚穴の落窪に
手もて搖らるゝ搖籃なり、
語らざれ、語らざれ！

空は屋根の上うへにありて
かくも青くかくも静けし、
屋根の上うへに梢は
その青き葉をゆする。

うち見る空に鐘は

やさしげに響くなり

樹の上に小鳥は

その嘆きをば歌ふなり。

あはれ、あはれ生いのちはそこにありしか、

飾りなき静かなる生活こそ。

かのおだやかなるもの音は

街のかたより響きくる。

——いかにかなせし、汝いまし、

絶間もあらず嘆くとて。

語れ汝いましの若き日を

そもいかにしておくりしと。

V

そも何ゆゑぞ

痛めるわが心

不安の翼に狂ほしき帆に海の上をば

吾にはいとも懐かしきすべてを

恐ろしき羽を伸して

我が愛は波頭なみながしらにぞ覆ひぬ、何ゆゑぞ何ゆゑぞ。